修士論文

音楽と関連性のあるヴィジュアル表現の制作研究

―デジタル平面作品における基礎造形的実践について―

岩手大学 大学院 総合科学研究科
総合文化学専攻 アート発信プログラム
YANG　CHENYU（ヨウ　シンイク）

指導教員：本村健太

2023 年 1 月

目次

序 ― 音楽専攻からヴィジュアル表現の制作研究へ

I 音楽と関連性のあるヴィジュアル表現

1. 「音楽と関連性のあるヴィジュアル表現」とは
2. 本研究の目的と意義 ― デジタル平面作品における基礎造形的実践
3. 先行研究 ― 画家のカンディンスキーとクレー

II 筆者によるこれまでの関連作品について

1.「クラリネットと女の子」
2.「生長」
3.「電子音楽」
4.「ゆらめく世界」
5.「Blue devils」
6.「冬コンサート」
7.「迷い少女」
8.「天宮の夢」
9.「まったりした時間」
10.「秋の味わい」
11.「melody of the night 5」
12.「華麗なる大円舞曲」
13. 作品展「視覚のカプリッチオ」(個展)

III 中国民族音楽をテーマとするヴィジュアル表現

1. モチーフとした中国民族音楽について
2. 中国民族音楽をテーマとする制作の方法論
3. 中国民族音楽をテーマとする制作のプロセスと結果

さいごに

序 ― 音楽専攻からヴィジュアル表現の制作研究へ

筆者は、母国の中国において小学生の頃、学校の「美術」の授業で習うものとは別に、自宅で自分でも絵を描き始めていた。その描画方法としては、主に鉛筆で自由に想像しながら描くというものであった。そして、その描画の内容としては、かわいい美少女や、杖を持った魔法少女など、漫画風のオリジナルキャラクターが中心で、時には花や葉の形など、植物をモチーフにした装飾的なデザインをすることもあった。そのような視覚的な表現を自ら楽しみながらも、それと並行して、小学２年生（8 歳）の頃からピアノ教室に通い始め、聴覚的な音楽の勉強も始めていた。

その後も音楽の勉強を続け、高校生になると課外活動としてブラスバンドに参加した。そうして、そこで指導していた先生の勧めによって、クラリネットを学ぶことになり、多くの演奏会に参加して、音楽の分野での訓練を重ねていった。このような経緯によって、音楽専攻として大学に進学した後も専門的な学修を続けることになった。しかしながら、大学時代においても美術やデザインの視覚的な表現に対する情熱は冷めることなく、大学では広報関連や雑誌印刷関連の学生サークルにも所属し、数多くの創作活動を行ってきた。

その間に音楽専門の活動においては、大学時代に何度かピアノコンクールに挑戦したが、顕著な成績を収めることはできなかった。筆者の手が小さいために課題曲の選択肢が非常に狭く不利であり、このことは音楽専門の学生として強い挫折感を感じさせられることになった。一方で、絵を描くような視覚的な表現は、筆者に満足感や幸福感をもたらしてくれるものになっていた。そうして、筆者は徐々に、専攻は音楽でありながらも美術の創作こそが、自分自身が本当にやりたいことなのではないかと意識するようになってきた。

改めて思い起こしてみると、筆者は、子どもの頃から現在まで、特に『犬夜叉』、『けいおん！』、『とある科学の超電磁砲』、『鋼の錬金術師』など、日本のアニメが好きであり、日本の文化についても、例えば日本人の礼儀、伝統衣装のスタイル、オタク文化などにとても興味を持っていた。そこで、これまで専攻してきた音楽を基礎として生かしながらも、日本の地において美術やデザインの領域での学修が始められないかを模索し続け、その機会をうかがっていた。ようやくその機を得て、2020 年（令和 2 年度）の後期より岩手大学の研究生となり、美術関連の学修を始めることになった。さらに、その翌年度から大学院への進学が叶い、音楽の学習経験を生かして「音楽と関連性のあるヴィジュアル表現の制作研究」を修了研究の研究課題とすることにしたのである。

以下にその研究成果を示したい。

Ⅰ 音楽と関連性のあるヴィジュアル表現

1. 「音楽と関連性のあるヴィジュアル表現」とは

研究課題における「ヴィジュアル表現」とは「視覚表現」のことであり、一般的にいわれているように「視覚に訴える表現」ということである。このような表現には、漫画、絵画、版画、イラストレーション、アニメーション、映像、広告デザインなど、自己表現から商業的な応用まで様々な表現の様式がある。

このようなヴィジュアル表現と「聴覚に訴える」音楽表現とは、どのように関係しているだろうか。これまでの芸術文化の発展を概観してみると、音楽や美術のそれぞれの芸術のあり方は、孤立したまま成長するのではなく、相互に影響しあいながら、今日に至っていると思われる。そこでは、他の領域の在り方を参考にして、吸収したり、変容したりする傾向も見られるようである。

これまで、音楽はヴィジュアル表現に新たなインスピレーションを与えてきた。そのような影響関係は、今日においてはとくに多方面において顕著になってきており、様々な事例をみることができる。

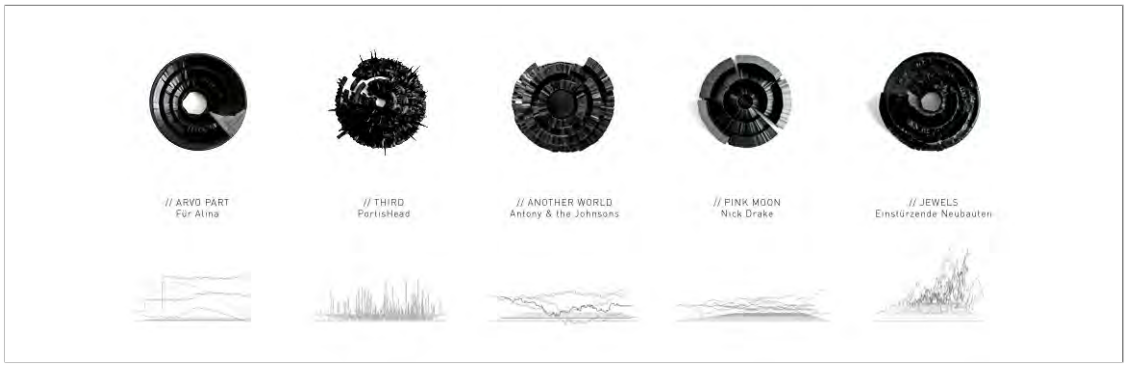


図 1：Microsonic Landscapes (Realität)2012 年

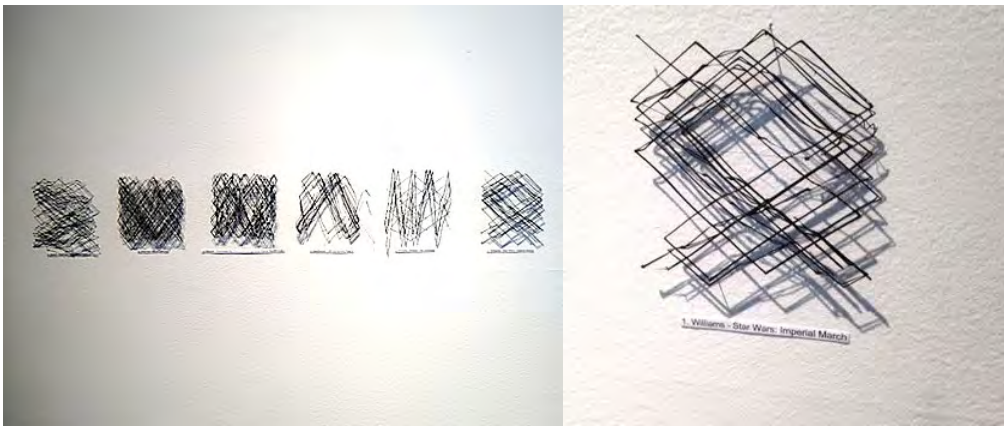


図 2：3D-Printed Music (Rickard Dahlstrand)2013 年

そのように音楽の波形を作品化している事例として、例えばメキシコの研究・実験スタジオ「リアリテート」(Realität)[1]は、最新のメディア技術を利用して音楽の可視化を行い、形成された映像を3D印刷して音楽彫刻（図1）を作っている。ここでリアリテートは、5枚のアルバムの音を物理的な物質に変換することで、「新しい空間とユニークな旅(a new spatial and unique journey)」[2]を提案している。この立体作品「Microsonic Landscapes」は、音楽の波形データを基に三次元の形に置き換え、3Dプリンターで出力することによって、円形の街並み、山脈、火山のクレーターのような形態として視覚化したものである。同様に、スウェーデンの芸術家リカルド・ダルストランド(Rickard Dahlstrand)も、音楽と3Dプリンターでの造形を結びつけて作品化[3]する試みを行っている。

図3：Lena Erlichのイラスト2016年

ロシアのイラストレーター、レーナ・エーリッヒ(Lena Erlich)[4]は、音楽および楽譜からインスピレーションを得て絵画的な創作をしている。このような音楽のイメージから導かれるヴィジュアル表現は、音楽が人間の聴覚に働きかける以上に視覚的にもその曲の訴求力を強化しており、場合によってはその曲の流行へと導くことに役立つことも

---

[1] http://www.realitat.com/microsonic/（2022年10月23日確認）

[2] https://weburbanist.com/2012/08/23/microsonic-landscapes-what-music-looks-like-in-3d/（2022年10月23日確認）

[3] https://www.core77.com/posts/24795/a-different-kind-of-3d-printed-music-by-rickard-dahlstrand-24795（2023年1月4日確認）

[4] https://plainmagazine.com/lena-erlich-decorates-sheet-music-quirky-miniature-illustrations/（2022年10月23日確認）

ある。

音楽情報を効果的に視覚で伝えることもでき、岩手大学の本村健太が「映像を奏でる」というVJ表現を論文「インタラクティブ映像メディア表現の構造学的研究に向けて －VJ表現のメディアアートへの展開事例とその基本原理の考察」[5]に示したように、音楽のインスピレーションを即興的に映像の手段で表現するような手法もある。このように音楽を対象としたヴィジュアルデザインには、ミュージックビデオ、チラシやポスター、レコードやCDのジャケットデザイン、ライブ演出の衣装やステージデザインなど多様なあり方がすでに存在している。そして、これらは、聴覚の心地よさと視覚的の美しさを合わせ持つヴィジュアル作品となりえるのである。

2. 本研究の目的と意義 ― デジタル平面作品における基礎造形的実践

音楽と関連性のあるヴィジュアル表現においては、絵画やポスターデザインなどの静的なイメージから、アニメーションや映画などの動的なもの、Webデザインやゲームなどの静と動を組み合わせたインタラクティブなデザインなど多岐にわたっている。静的な形式は動的な形式よりも直接的で効率的な表現となる傾向があり、静的な形式が動的な形式の基礎となることも多いと思われる。そこで、本研究においては、その最も基礎的な表現形式である静的なイメージの視覚表現、とくにデジタル平面作品からの考察を中心に、その理解と伝達を音楽の領域の伝達につなげていく試みを行うことにする。

これは筆者独自の「アートとアートの間のコミュニケーション」という捉え方である。音楽と美術・デザインにおける異なる芸術領域の交流と、その帰結としての変容を探ることで、ヴィジュアル表現の表現領域を豊かにするとともに、音楽芸術の理解を深め、芸術愛好者の美意識や関心を高めるような制作になることを目指している。

このように本研究は、筆者の音楽経験に基づく音楽の理解を軸にして、音楽とヴィジュアル表現の関係を探るものである。筆者はとくに、視覚的な造形表現のための制作ツール（PhotoshopやIllustratorなど）の使用によって、聴覚的な音楽表現の再現や再編成、そして総合化を目指す試みを行っている。音楽とヴィジュアル表現を融合させる創造的な試みを通して、本研究では、基礎造形（構成学）的なアプローチで、音楽の芸術的な美しさをヴィジュアル表現に関係づけながら提示する表現様式を模索することが目的となる。

3. 先行研究 ― 画家のカンディンスキーとクレー

音楽と関連性のあるヴィジュアル表現を語るうえで、美術史上も著名な画家のワシリ

---

[5] 本村健太「インタラクティブ映像メディア表現の構造学的研究に向けて －VJ表現のメディアアートへの展開事例とその基本原理の考察」『岩手大学教育学部研究年報』第71巻 2012年3月

ー・カンディンスキー（Wassily Kandinsky, 1866-1944）は避けて通れない人物である。カンディンスキーは、1866 年にロシアに生まれ、両親ともに楽器演奏に秀でていたため、幼い頃から家庭で音楽の影響を強く受ける環境にいた。そうしてカンディンスキーは、ピアノやチェロを弾くだけでなく、詩を書いたり、絵を描いたりもしながら、複合的な学習と経験を積み重ねることによって、鋭敏な感性を持つ芸術家になった。カンディンスキーの制作に対する姿勢は、筆者の制作研究においても参考になるため、ここでその概要を確認しておきたい。

カンディンスキーは、『芸術における精神的なもの』（1911）という著書の中で、「絵画は色、形、線によって作られる音楽である。抽象画は、一種の視覚的な音楽といえる」[6]としている。そして彼は、絵画の構造的傾向を次の 2 つに分けている。

①「旋律」と呼ばれる単純な構造（明白で単純な形に適応される）

②「交響曲」と呼ばれる複合構造（一つの主要な形式に属するいくつかの異なる部分から構成される）

そして、「この両者の間には、さまざまな過渡的形態があり、その中には明確な『主題』となりえたものもあり、その発展過程は音楽のそれとほぼ平行である」[7]と論じている。

カンディンスキーは、作品を「印象(Impression)」・「即興(Improvisation)」・「構成(Composition)」の 3 つに大別し、それらを絵画の「交響的構成」[8]として統一した。特に、彼の抽象的な作品の名前に共通する後者の二つ「即興・構成」は、音楽の用語としてもすでに一般的に使われていたものであり、それは彼が絵画の理論を構築するために使用していた。ここには音楽理論の流用がみられるのである。

また、彼はこの本の中で、「色の音は非常にはっきりしており、明るい黄色を低音で、暗い青を高音で表現できる人はほとんどいない」[9]と述べている。音楽は感情を伝え、感動体験を生み出すが、色彩もまた感情表現であり、感情の伝達において重要な役割を担っている。カンディンスキーは色彩と音楽の間の関係について以下のように明確な自己完結の持論を述べている。

白は「旋律の突然の中断」、黒は「深い終了性の休止」、黄色は鋭くて、人をいらいらさせる「厳しいラッパの音」、緑は最も穏やかだが単調な「落ち着いたバイオリンのアルト」、赤は限りなく暖かく、強い力を持つ「オーケストラのトランペット、大きく澄んで高い」、そして紫色は病的で衰えた性質をもって「イギリスのパイプに相当するもの、あるいはファゴットの低音」である。彼は経験的な知覚に基づく多くの例を挙げ、

---

[6] カンディンスキー『芸術における精神的なもの』中国社会科学出版社、1987 年、p.4

[7] カンディンスキー、同書、p.71

[8] カンディンスキー、同書、pp.72-73

[9] カンディンスキー、前掲書、p.34

「色のトーンは、音のトーンと同様に、非常に細かく構成されており、魂の中に様々な感情を呼び起こす 」[10]と結論づけていた。

1911 年､カンディンスキーは音楽家アルノルト･シェーンベルク（Arnold Schönberg, 1874-1951）のコンサートを聴いた後、その音楽が彼に与えた感覚をキャンバスに表現した。それは、《印象Ⅲ》（コンサート）[11]（図 4）の創作となった。コンサートにおける音楽の力に感激した結果として、この絵には、コントラストの強い色を基調としてピアノと観客のイメージを鮮やかに表現している。また、1913 年に作られた《コンポジションⅦ》（図 5）では、具象的なものではなく抽象的な表現となっていた。この絵は、規則性のない、瞬間に思いついたかのような、はっきりと捉えられない激動の線、そして律動の色で描かれている。絵全体には、激高した交響楽のように、無限に広がる想像の空間がもたらされている。このように、この絵には、カンディンスキーが捉えた音楽の「精神力」を見ることができる。

図 4：印象Ⅲ（コンサート）

図 5：コンポジションⅦ

その後、カンディンスキーは 1923 年に著した『点・線・面』[12]において、点、線、面、それぞれの関係を定義し、これらの要素分析が作品の内的リズムへの橋渡しであると述べている。彼は、「点」が最も簡潔で幾何学的な形式であり、音楽の中の太鼓やトライアングルの音のような、短時間でリズムを作り出していくものと考えていた。点から発生した「線」は、より方向性や張力を持ち、このようにして音楽におけるほとんどの楽器は線的な性格を持っているという。

異なる楽器の音高は線の太さに相当する。バイオリン、フルート、ピッコロは非常に細い線を生み出し、チェロとクラリネットはやや太い線である。低音楽器の演奏によって生

---

[10] カンディンスキー、前掲書、p.48-55

[11] https://www.aac.pref.aichi.jp/blog/aac/2011/03/000452.html（2022 年 11 月 11 日確認）

[12] カンディンスキー『カンディンスキー論点線面』中国人民大学出版社、2003 年、p.18-36

まれた線はますます太くなり、二重低音楽器や大型の最低音調になる。[13]

さらに「面」については、2 本の水平線と 2 本の垂直線で囲まれた範囲で、水平線は冷たく静止し、垂直線は暖かく静止しており、まるで 2 つの声楽パートのように、絵全体の響きを決定しているという。そして、「面」の議論の中で、カンディンスキーは描かれた対象と画面の端との距離にも特別で重要な役割を見出している。

画面の境界にすぐ近い形は構造の〈劇的〉な音を高め、逆に、境界から離れた形は画面の中心域に多く集まり、構造に叙情的な音を与える。[14]

このように、カンディンスキーの理論には多くの感性的な観点が含まれているが、彼の感覚と分析は私たちにとっても参考となる重要な価値がある。

音楽が時間芸術であるのに対し、絵画は空間芸術である。カンディンスキーは音楽と絵画の垣根を取り払い、双方の芸術形式における抽象的なあり方を原点とし、両者が象徴的に人の感情に訴えるものをつなぎ、抽象絵画を方法とすることで、音楽の視覚化を深く探求していったといえる。カンディンスキーは、音楽と絵画は同じルーツを持つものであり、それらは共に内なる精神を追い求めつつ、そこに生まれる強い感情を表現していた。そこで音楽は、ある解釈によって視覚化されるのであり、音楽と絵画は共通の精神的な核を持ち、ある種の形を通して相互に浸透し、変容し合うことができると考えていたようである。

同時代のパウル・クレー（Paul Klee, 1879-1940）は、カンディンスキーと同様、抽象的な形態で内的感情を表現することに秀でた画家である。クレーは音楽一家に生まれ、音楽だけでなく絵画も学び、若くして視覚芸術の道を選んだ。抽象画の影響を受け、色彩のアイデアを構想するうちに、音楽と絵画の関係を意識するようになった。音楽専攻であった筆者には、彼の作品に音楽の流れが「見える」ように感じられてならない。

例えば、作品「The Rose Garden」（図 6）では、バラ園の画面が細分化された断片で多数敷き詰められていながらも調和しており、赤だけでも多様な色調の変幻が表現されている。さらに、挿し込まれた線は変形した五線譜のようであり、メロディーの抑揚のように、バラの花が五線譜に並べられて音符のようになっている。一方で、作品「New Harmony」（図 7）では、赤と緑を中心としたコントラストの強い色調を選び、平積みのカラーブロックで、音楽の手法としての「模倣対位法」の方式を配色に応用しているようである。絵を構成する要素を上下逆に配置することで、「音の幅」が広がり、画像自体のリズム感も強くなる。カラーブロックのひとつひとつが音符のようで、真ん中から

---

[13] カンディンスキー、同書、p.63（筆者翻訳）

[14] 同書、p.94（筆者翻訳）

周囲に向かって徐々に色の明度が下がっていき、まるでそれぞれの音符が命を持って楽譜の中を飛び回っているかのようである。クレー独自の方法により、鮮やかでユニークな音楽のイメージを構築しているといえる。

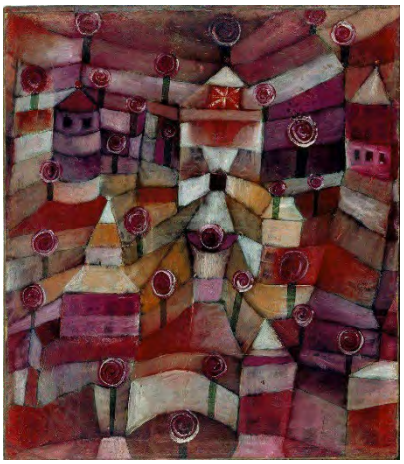


図 6：The Rose Garden

図 7：New Harmony

パウル・クレーと芸術スタイルが似ているフランスの画家ロベール・ドローネー（Robert Delaunay,1885-1941）は、音楽との共感覚から色彩を論じ、「私は人が音楽の場合フーガによって自己表現するように、色彩を用いて、彩色されたフーガ風の楽句を演奏したい」[15]と述懐している。ドローネーは色と音楽を同列に論じ、絵画と音楽の構造を対応させ、時間的な要素を導入することで画面に動きとスピードを与えようとした。

> 動きのダイナミズムの実現は、色彩の同時対比が引き起こす効果によって試みられた。併置された色彩は相互に輝きと際立ちを生じさせ、純粋な光へと変換される。ドローネーは、色相環で隣接する色による対比には「遅い動き」、補色による対比には「速い動き」の効果があると考え、配色に反映させた。[16]

ドローネーの絵「Simultaneous Disc」（図 8）では、同時に対比された色彩が画面全体に与えられている。この作品のダイナミックな配色を鑑賞すると、筆者には視覚的な回転の感覚が生じた。その絶えず生まれるリズムによってもたらされる作品全体の運動を感じるのである。

---

[15] 色彩文化研究会『配色の教科書：歴史上の学者・アーティストに学ぶ「美しい配色」のしくみ』パイインターナショナル、2018 年、p. 204

[16] 同書、p. 207

図 8：Simultaneous Disc

これに加えて、バウハウスで色彩構成論と基礎教育を行ったヨハネス・イッテン（Johannes Itten,1888-1967）は、色相環から幾何学的に色を選択することによって、整合性の高い調和のとれた配色ができると考えていた。そこで、色彩を音楽と類比し、12 色相環から一定の間隔（2、3、4 など）で選択した色を組み合わせると共鳴し、ハーモニーが形成されるとして、それを「色彩の和音」[17]と呼んだ。

その後も音楽とヴィジュアル表現のつながりについて論じられ、これまで理論と実践がなされてきた。基礎造形の専門家である三井秀樹は、その著書『新構成学 ： 21 世紀の構成学と造形表現』において下記のように述べている。

> リズムは、本来音楽の旋律のように、時間軸にそって変化していく。くり返し(リピティション)は配列したときに生じる造形的な旋律であり、構成学では現在なお主要な造形秩序となっている。あるひとつのユニット(単位形)が・いくつかくり返し配列されると、リズムの感覚が生じる。[18]

これにより、繰り返しの構成の中でリズムの美しさが十分に表現しえることがわかる。リズムとは、各拍子間の動きの軌跡であり、それによって具体的な造形ができあがる。

酒井英樹の論文「色と音の共感覚」では、音楽と色を対応させる実験が行われた。この実験の内容は調性や音高の異なる和音を聴覚刺激として被験者に与えて、その和音に

---

[17] 同書、p.113

[18] 三井秀樹『新構成学: 21 世紀の構成学と造形表現』六耀社、2006 年 p.106-107

合う色を回答させるという実験方法によって、音属性（調性、音高）と色属性（色相、明度、彩度）の対応関係を求めた。明らかになった点はつぎの通りである。

> 長調の明るく楽しいイメージが、オレンジなど暖色のもつ暖かいイメージに対応し、さらに、短調の物悲しいイメージが、青などの寒色のもつ冷たいイメージに対応している。長和音、短和音とも、音が高くなるにつれて、明るい色が選ばれる傾向がある。これは、「音の高さ」＝「色の明るさ」の類推が成り立っていると考えられる。対応関係の例外は、音高が c2 以上になると、調性によらず黄および白が多く選ばれる。[19]

筆者の制作においては、これまで考察したように、音楽と結合した色彩理論に基づくとともに、楽曲の形式や旋律の変化を平面構成の参考にして、ヴィジュアル表現を多様に展開していきたい。

II 筆者によるこれまでの関連作品について

これから解説する作品群は、2020 年度後期からの岩手大学人文社会科学部研究生としての在学時、そして、2021 年度前期からの岩手大学大学院総合文化学専攻入学後に手掛けたものである。

修了制作の前段階として、事前に自己表現的なあり方と、制作手法の実験的なあり方をともに試みてきた。そうして、継続してきた制作物の成果を 2021 年度後期には展示の機会（作品展「視覚のカプリッチオ」）を得るとともに、その後の修了制作の方向性を確認する資料とした。

---

[19] 酒井英樹「色と音の共感覚」『都市のフィクションと現実』（大阪市立大学大学院文学研究科 COE 国際シンポジウム）, 2004 p.48（https://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/wp-content/uploads/2005/02/0503fiction_05_sakai.pdf、2022 年 10 月 23 日確認）

1.「クラリネットと女の子」

図 9 :「クラリネットと女の子」2021 年

Adobe Illustrator による平面作品である。クリスマスの季節、森林の中でクラリネットを演奏する少女を描いている。この作品は青を主として、冷たい色合いの配色で、寒い冬の雰囲気を表現している。丘と木は、シンメトリーとなるような対称性にすることで構図の安定性を高め、太陽と川と人物は、S 字型の構図とすることで、画面を生き生きとさせるような空間にしている。筆者はクラリネットを演奏する経験をもち、絵の中の少女に自分自身を投影している。ここでは、山中で自分のやりたいことを自由にやっている少女を描くことで、音楽に対する愛と自由に対する憧れを表現した。

2.「生長」

図 10:「生長」2021 年

手描きしたものをスキャナーで取り込みデジタル化して、Adobe Photoshop で画像処理した平面作品である。植物が生長（成長）する姿を、画面に流動感が出るように工夫して描いた。作品の神秘性と魔法のような雰囲気を醸し出すため、背景の色彩は紫にした。あたかも魔力を有するかのように狂おしく生長している植物の姿を表現するため、律動性のある放射状の構図を使い、画面の奥行と衝撃性を強めた。さらに、画像の表面には、疑似的に砂地のような凹凸のあるテクスチャーを施している。

3. 「電子音楽」

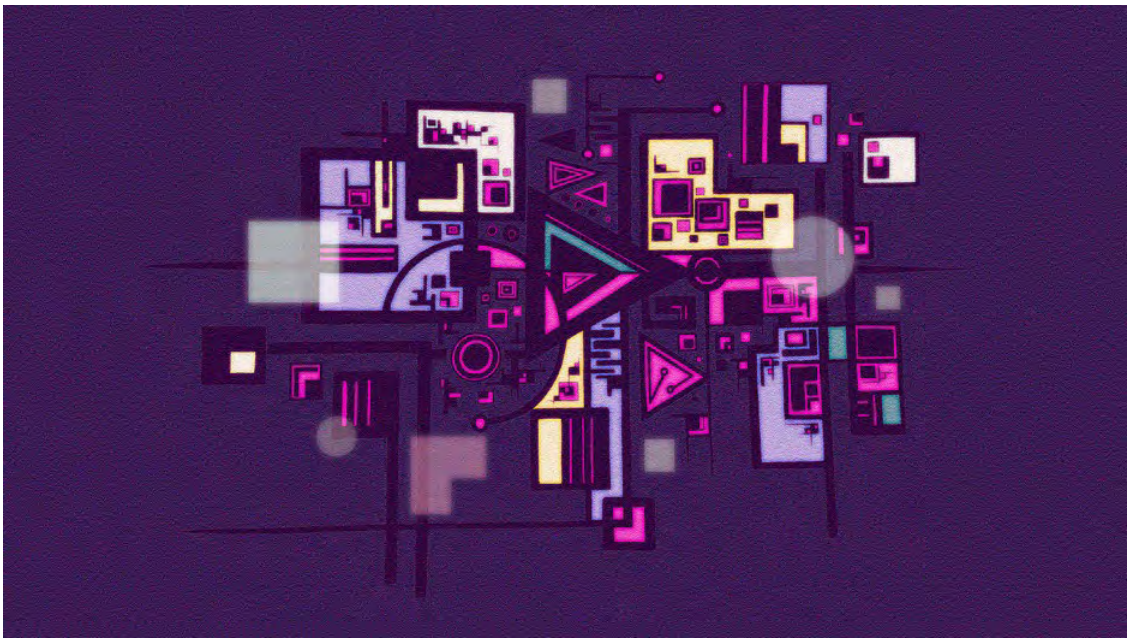


図 11:「電子音楽」2021 年

手描きしたものを写真撮影してデジタル化し、Adobe Photoshop で画像処理した平面作品である。米国の MitiS（マイティス）という DJ の電子音楽を想起して、そのリズム感やグルーブ感を視覚的に表現している。ここでは、大きさの異なる幾何学図形や線を使って、水平または垂直に並べることにより、音の大きさ、音色の変化、そして時の流れを示している。電子音楽が人に与える独特な体験を伝えるため、筆者がこの DJ をイメージする紫を背景色として、明暗の変化や補色対比を用い、画面の視覚的効果を強めている。さらに、画像の表面には、疑似的に岩肌のような凹凸のあるテクスチャーを施している。

４．「ゆらめく世界」

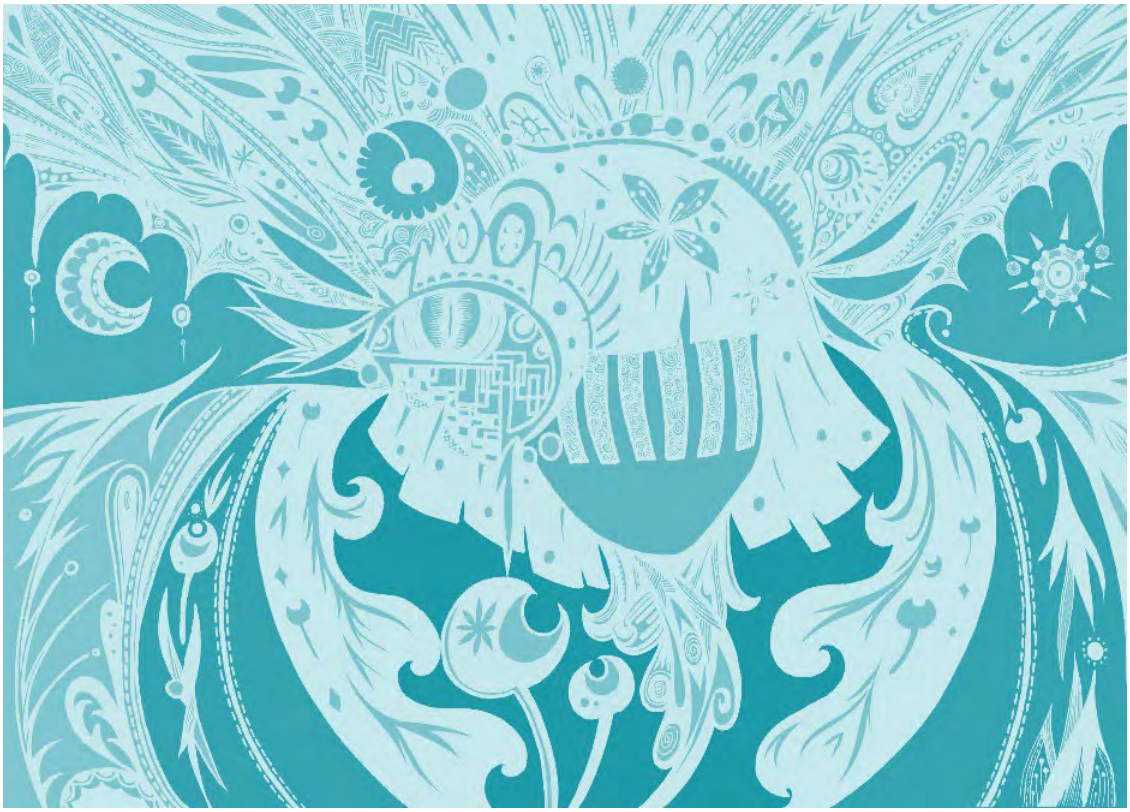


図 12:「ゆらめく世界」2021 年

手描きしたものをスキャナーで取り込みデジタル化して、Adobe Photoshop で画像処理した平面作品である。音楽に浸る人の想像する世界を描いている。音楽に対する感受性は人によって異なるので、簡単な色調とし、明るい青緑色を主として、その他の色を想像する余地を残している。水平、対称、放射線の構図を使って、多くの装飾的な線と模様を組み合わせ、人の思いが音楽によって千変万化することを表している。少女の頭像が植物のイメージと重なるように見えるのは、音楽の世界では自分が植物にでさえなれるということである。これは、筆者にとって、音楽は何でもできる自由な世界だと伝えたい意図による。

5. 「Blue devils」

図 13:「Blue devils」2021 年

手描きしたものを写真撮影してデジタル化し、Adobe Photoshop で画像処理した平面作品である。「Blue devils（青い悪魔）」と呼ばれるブルース音楽は、その憂鬱さを特徴としているが、この「青い悪魔」をモチーフに具象化して表現している。青～紫の「冷暗感」のある配色により、憂鬱でネガティブな感じを示した。白い背景に合わせて、中心に集中する構図を採用し、作品のテーマを強調した。この作品は、主にブルース音楽に対する理解と自分の心の中のブルース音楽の具象化を試みている。さらに、画像の表面には、疑似的にキャンバス地のような凹凸のあるテクスチャーを施している。

6. 「冬コンサート」

図 14:「冬コンサート」2021 年

手描きしたものを写真撮影してデジタル化し、Adobe Photoshop で画像処理した平面作品である。冬のコンサートをイメージして、青い背景と白い線で表現した。画面の左右にコンサートホールの螺旋（らせん）階段と冬の雪景色を配置している。背景には、トロンボーンとホルンの変形、中央には植物の変形があり、多くの装飾的な線や模様につなげて表現力を高め、ここに「冬でも音楽は万物を成長させる」という思いを伝えた。さらに、画像の表面には、疑似的に油絵のような凹凸のあるテクスチャーを施している。

7. 「迷い少女」

図 15: 「迷い少女」2020 年

手描きしたものを写真撮影してデジタル化し、Adobe Photoshop で画像処理した平面作品である。この作品は筆者が日本に留学したばかりの時期に作ったもので、作品を通して将来に対する不安や迷いを表現した。絵の中のチョウの少女は、サナギから抜け出そうとしながらも、その先については迷いに陥っている。中心に配置した構図により、チョウ少女の存在を強調し、背後には少女を守護する魚を丁寧に描いた。主体を描写した青い線は、内心の憂鬱と迷いの情緒を示し、背景の黄色は、内心の明るい未来に対するあこがれを示している。さらに、画像の表面には、疑似的に岩肌のような凹凸のあるテクスチャーを施している。

8. 「天宮の夢」

図 16: 「天宮の夢」2020 年

手描きしたものを写真撮影してデジタル化し、Adobe Photoshop で画像処理した平面作品である。中国の曲「天府楽」を聴いて、頭に浮かんだ映像を具象化した。画面の中の太陽のイメージで、暖かいオレンジ色を主に使っている。対角線の構図で立体感、流動感、拡張感をもたせながらも、太陽、雲、植物、生物などの形状を付加して、空に浮かぶ街の穏やかなたたずまいを描いた。これら多くの曲線や装飾の描き込みは、画面を豊かにすることになった。

9.「まったりした時間」

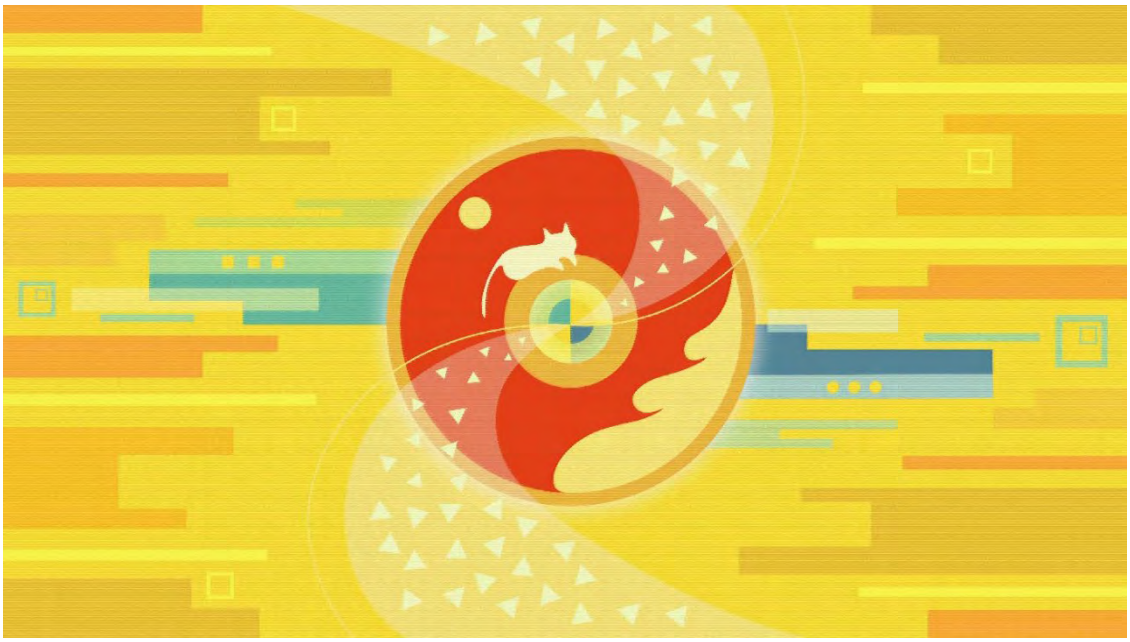


図 17:「まったりした時間」2021 年

Adobe Illustrator による平面作品である。回転中の CD をイメージして、画面の両側に配置した長い線と短い線によって、音楽の流れを表現している。対称構図を用いて画面のバランスを高めた。猫がのんびりしている様子と暖かい配色で、「まったりした午後の時間にゆったりとしたメロディーが流れる」という雰囲気を醸し出した。

10.「秋の味わい」

図 18:「秋の味わい」2022 年

手描きしたものを写真撮影してデジタル化し、Adobe Photoshop で画像処理した平面作品である。実際にある木の葉を参考にして、一面の落ち葉の秋景色を描くことで、自然への美しい連想につながる表現している。秋を思わせるブラウン、ベージュ、イエロー、オレンジなどの暖色系を使い、実際の葉の形状に、自分が想像する植物のイメージも重ねて世界観を作っている。放射構図により、画面が外に広がる方向性とダイナミックさを強化した。さらに、画像の表面には、疑似的にキャンバス地のような凹凸のあるテクスチャーを施している。

11.「melody of the night 5」

図 19:「melody of the night 5」2022 年

手描きしたものを写真撮影してデジタル化し、Adobe Photoshop で画像処理した平面作品である。中国の石進という作曲家の「melody of the night 5」のピアノ曲をモチーフにした。このピアノ音楽のテーマを、ピアノキーや五線譜を変形して表現した。ここでは、長短の異なる有機的な線、円によって、ピアノの音色を視覚化している。星型や四角い模様などを用いて窓の外の夜景を表現し、オレンジ、黄を主とする配色と装飾的な線によって、室内の暖かい明かりと流れるピアノの音を表現した。テーマを対角線に配置し、立体感、拡張感、運動感がある。さらに、画像の表面には、疑似的に砂地のような凹凸のあるテクスチャーを施している。

12.「華麗なる大円舞曲」

図 20:「華麗なる大円舞曲」2022 年

iPad と Apple Pencil を用いた Procreate による平面作品である。ショパンという作曲家のピアノ曲「華麗なる大円舞曲」をモチーフに、曲を聞きながら頭に浮かんだ音楽の色とリズムを具象化した。画像全体としては、楽譜の上で音符が踊っているようなイメージで、背景の線の変化によってリズム感を強調している。

画面中央には、音符が連なったような黄色とオレンジが絡み合った曲線、三角形、有機的な形、円が描かれた。背景は青と青緑を基調とし、リズミカルな波線によって、ピアノの繊細なサスティンペダル効果のように色が絡み合い、独特の雰囲気を作りだしている。黄色やオレンジなどの暖色系で華やかで明るい「音楽色彩」(音楽を聴いた際の色彩的なイメージ) を表現し、青や青緑などの寒色系で諧謔やリリカルな音楽色彩を表現しており、この二つが織りなすショパンの「華麗なる大円舞曲」のムードを反映するようにした。オレンジ色の曲線に黄色の半円を千鳥配置しているのは、曲の弱拍にアクセントを挟むという、従来のサークルダンスとは一線を画す創意工夫がなされていることを表した。画面上部の回転する三角形は、円舞曲の三拍子のリズムと、音楽の拍子に合わせたダンスのステップの軌跡を表現しており、黄色とオレンジの丸は、曲をより遊び心のあるものにするための装飾音とスタッカートを表現した。さらに、画像の表面には、疑似的に砂地のような凹凸のあるテクスチャーを施している。

13. 作品展「視覚のカプリッチオ」（個展）について

上記の作品群は、図 21 の「視覚のカプリッチオ」と題した展覧会（個展）において展示した。

会期：2022 年 1 月 17 日（月）～1 月 21 日（金）
　　10：30～17：00（最終日は 15：00 まで）
会場：岩手大学図書館 1 階 アザリアギャラリー

図 21：展覧会ポストカード

挨拶文：

本日は「視覚のカプリッチオ」展にお越しいただき、ありがとうございます。私は、岩手大学 大学院 総合科学研究科 総合文化学専攻 アート発信プログラムに所属し、音楽と関連性のあるヴィジュアル表現の制作研究に取り組んでいます。

今回は「視覚のカプリッチオ」というテーマのもと、自分の音楽についての思いや考えを自由に視覚で表現してみました。テーマの「カプリッチオ」とは、音楽の一形式で、狂想曲（きょうそうきょく）とも訳され、形式にとらわれない、自由で気ままな気分を盛り込んだ楽曲を言います。そのため、今回の作品も自由で想像力に満ちた作品が多いです。

音楽が持つ素晴らしい力、音楽が語る物語、音楽そのものが持つ美しさとヴィジュアルの融合を、私の作品から感じ取っていただければと思います。どうぞごゆっくりご覧ください。

図 22：展覧会場の様子

--

[資料]

YANG CHENYU（ヨウ シンイク）「視覚のカプリッチオ」展アンケート

この度は、音楽をテーマとするヴィジュアル表現の展覧会「視覚のカプリッチオ」をご高覧いただき、誠にありがとうございます。

よろしければ、下記のアンケートにご協力いただければ幸いです。

● 印象に残った（良いと思った）作品はどれしょうか。

（チェックをお願いします。複数回答可）

☐ クラリネットと女の子　☐ 生長　☐ 電子音楽　☐ Blue devils

☐ ゆらめく世界　☐ 冬コンサート　☐ 迷い少女　☐ 天宮の夢

☐ まったりした時間　☐ 秋の味わい　☐ melody of the night

☐ 音楽ポスター①月夜　☐ 音楽ポスター②楽団　☐ 鳳凰

☐ 視覚のカプリッチオ　☐ 自由になりたい

● 印象に残った（良いと思った）作品のどこが良かったでしょうか。
（チェックをお願いします。複数回答可）
もし、具体的に書いていただけるならば、（　　）にお願いします。
□ 絵全体のテーマや世界観（　　）
□ 描いてある対象・人物・モノなど（　　）
□ 絵の構図や配置（　　）
□ 配色や色調（　　）
□ この絵の技法（テクニック）（　　）
□ その他（　　）

● その他、この展覧会や個々の作品について、ご感想やご指導いただけるようなことがありましたら、こちらにお願いいたします。

--
アンケート結果（31 枚回答中）:
● 印象に残った（良いと思った）作品
□ クラリネットと女の子：6
□ 生長：5
□ 電子音楽：10
□ Blue devils：10
□ ゆらめく世界：7
□ 冬コンサート：7
□ 迷い少女：5
□ 天宮の夢：11
□ まったりした時間：6
□ 秋の味わい：7
□ melody of the night：8
□ 音楽ポスター①月夜：6
□ 音楽ポスター②楽団：4
□ 鳳凰：9
□ 視覚のカプリッチオ：3
□ 自由になりたい：9

● 印象に残った（良いと思った）作品のどこが良かったか。
□ 絵全体のテーマや世界観：18

□ 描いてある対象・人物・モノなど：10
□ 絵の構図や配置：18
□ 配色や色調：21
□ この絵の技法（テクニック）：6
□ その他：1（質感や立体的にみえる感じについてコメント）
--

アンケートの結果として、テーマや世界観としての音楽との関連性によるデジタル平面作品の制作については好評であり、基礎造形としての構成や配色計画についても同様に好評であった。

以上の結果より、今後の制作の方向性として、これまでの手法を継続して修了制作に取り組むこととした。

III 中国民族音楽をテーマとするヴィジュアル表現

1. モチーフとした中国民族音楽について

修了制作のテーマである「中国民族音楽」について、以下に解説する。

中国民族音楽は、中国の伝統的な「民俗音楽」であり、中国の伝統的な楽器を用いて、ソロや合奏で演奏される中国の「伝統音楽」のことを指す。中国の民族音楽の歴史は古く、西周時代から春秋・戦国時代にかけて笙（しょう）・竽（ う ）・瑟（しつ）・筑（ちく）・琴などの器楽が流行し、秦・漢時代には鼓吹楽（こすいがく）、魏・金時代には清商（せいしよう）楽、隋・唐時代には琵琶楽(びわがく)、宋時代は管絃樂、元・明・清時代は太鼓・銅鑼（どら）・絃索（げんさく）・清楽（しんがく）が盛んに演奏されたという[20]。

その土地の気候、風景、風土、人々の気質、風習、古くからの信仰や伝説、個人の感情や物語、人生の情景など、すべてが音楽の中に自然に流れ込み、興味を持った人に語りかけてくるようになる。代々、あるいは何世紀にもわたって歌い継がれてきた音楽や歌を聞けば、それらのぼんやりした遠い風習や伝統、習慣や文化、そして自然の風景までもが、再び呼び覚まされ、鮮明になっていく。数百種類の民族楽器、千種類近い芝居、膨大なジャンルの音楽が、時間の経過とともに、あるいはさまざまな理由で次第に忘れ去られ、今日の急速な発展の時代に若い人たちに受け入れられるかどうかはさらに不安定であり、このままでは失われる可能性さえある。

中国民族音楽をモチーフとするヴィジュアル表現は、音楽作品をより多面的に表現することができるとともに、中国民族音楽の伝承と発展のためにも新たな可能性を提供するものとなる。

ここで、修了制作のモチーフとする中国民族音楽の各曲について言及しておく。

1)「銀色の月光の下で」

この曲は、1950 年に新華書店西北総支店が出版した「新疆民謡」に収録されており、中国新疆ウイグル自治区タタール族の民謡を元にアレンジされた曲である。この優美な曲調は、その深遠な境地を演出している。この歌は、新疆の若者の愛情に対する純潔なあこがれや終わることのない迷い、そのような愛情という永遠のテーマが、人の声と各種楽器の相互作用を通じて解釈されている。

---

[20] 付月『中国民族音楽の定義と分類――「中国民族音楽」を評価する』[J];新聞戦線;2018 年 08 期、缇妮『地図対標の風貌、メロディータッチの礎石』中国教育新聞社；2021 年 12 月 3 号；第 4 版 http://www.jyb.cn/rmtzgjyb/202112/t20211203_668774.html（2022 年 11 月 4 日確認）

2)「霓裳羽衣」(げいしゃううい)

この曲は、中国唐代の宮廷楽舞で、唐玄宗が道教のために作った曲である。この曲は、太清宮の祭祀の時にも演奏で使われたことがあるという。舞曲の内容は、仙真の上界での生活情況を表現し、曲の旋律では、清浄な仙境と羽衣をまとい穏やかに踊る仙女のイメージを描き、その場で曲を聴く者に仙境のイメージ豊かに伝えたことだろう。

3)「延河畔に親を迎える」

この曲は、中国の作曲家梁欣が 1980 年に創作し、陝北（せんほく）民謡の中の「黄羊を打つ調」参考にし、濃厚な陝西（せんせい）の風情を持っている。タイトルにある延河は、延安市のシンボルであり、「延安母河」と呼ばれている。この曲の自由奔放で喜びに満ちた音楽のメロディーは、延河畔の美しい風景を描きつつ、延安での波瀾万丈（はらんばんじょう）の人生でありながら濃厚な温情を訴えている。

4)「蘇南小曲」

この曲は、中国の作曲家朱昌耀が 1979 年に錫劇の曲牌「老簧調」を改編した二胡曲で、蘇南人民の喜びと情熱を表現している。この曲は上品で古風なメロディーが特徴的であり、杭州西湖の美しい景色の一角を繊細に描いている。この曲では、遊覧客がのんびりと蘇堤の上を歩いて、詩のような美しい景色を見ている様子が描かれている。

5)「茉莉花」(まつりか)

この曲は、中国の作曲家何倣が 1957 年に中国江蘇の民謡「花調」を改編したもので、「小調」類の民謡に属し、「単楽段」の歌である。これは鮮明な民族の特色を持つ「五声調式」により、柔らかくて優美な江南の風格を表現している。この曲では、一人の上品で賢淑な少女が香り立つジャスミンの花に惹かれ、花を摘もうとしたが、健気に咲く花に対しては摘むに摘めない優しい気持ちの情景を描いている。

6)「彩雲追月」(彩られた雲が月を追いかける)

この曲は広東音楽の有名な曲であり、最初は清代の広東民間広東音曲譜に由来し、李鴻章が両広総督を務めていた際に、この曲を宮中にて演奏したことがあるという。1932 年、中国の作曲家任光はそれを再編曲し、民族色に富んだ五声調式を使用し、そのスタイルは軽快かつ独特で、典型的な広東民間音楽スタイルを作り出している。

2. 中国民族音楽をテーマとする制作の方法論

今日において、中国民族音楽をテーマにした平面作品は少なく、あるとしても従来の水墨画の形式で創作された作品が多い。

例えば、楽曲のテーマを表現した作品として、中国の水墨画家傅抱石が創作した「平沙落雁」（へいさらくがん）がある。楽曲のタイトルでもあるこの作品において、彼はその楽曲が表現している境地を描き出している。

また、歴史的にこの曲を演奏するのが得意な有名人、嵇康（けいこう）の物語をテーマにしたものもある。例えば、中国の水墨画家範曽が創作した「広陵散」（こうりょうさん）は、古琴曲「広陵散」を演奏するのが得意な嵇康を主体とし、彼が三人の聴衆のために演奏する場面を描き、その聴衆が曲に陶酔している様子を描くことで嵇康の演奏技術の高さを表現している。

図 23：「平沙落雁」（へいさらくがん）傅抱石 1942 年作
（「平沙落雁」：中国十大古琴曲の一つ、中国明朝に起源）

図 24：「広陵散」（こうりょうさん）範曽 2004 年作
（「広陵散」：中国十大古琴曲の一つ、中国明朝に起源）

しかし、筆者の修了研究の制作においては、中国民族音楽のタイトルの具体的なイメージを捨て去り、楽曲そのものの形式構造や楽曲を聴いた際の筆者の感情でヴィジュアル表現に仕立てている。この表現方法はより抽象的で、楽曲自体の要素の再構築となり、中国民族音楽のヴィジュアル化として新しい試みでもある。

① 楽曲の形式構造および旋律の変化を分析し、絵として描く線の構成において参考にする。そうして、線の構成方法の違いによって、作品のリズム感や時間軸の変化を表現できるようにする。

② 音楽における強弱コントラスト、速度、調性、ハーモニーによる感情表現を絵画における色彩構成の参考とする。先行研究で確認したように、音楽と結合した色彩理論に基づくとともに、楽曲に筆者自身が抱いた感情を加えながら色彩構成を行う。

3. 中国民族音楽をテーマとする制作のプロセスと結果

1)「銀色の月光の下で」

図 25：制作過程「銀色の月光の下で」

図 26：制作過程「銀色の月光の下で」

iPad と Apple Pencil を用いた Procreate による平面作品である。この絵は、中国新疆ウイグル自治区タタール族の民謡「銀色の月光の下で」をテーマにヴィジュアル化している。この曲はバイオリン独奏、ピアノ伴奏で構成されている。筆者は、一貫性のある線を大量に用いて、バイオリンの流動感のある音色を表すとともに、画面の下部には交互に浮遊する円を配置してピアノ伴奏の効果を示すようにした。この曲の構造は三部形式で、旋律の中には「順次下降進行」が多く、この曲の旋律に深い悲しみの色を与えている。そこで筆者は画面の色に、静けさと憂鬱さの特徴を持つ青をメインカラーに選

んだ。同時に、この曲にはいくつかの「跳躍進行」が行われ、さらには大きな「跳躍上行」を意識したフレーズもあり、少し切ないリリックに、ある種の感情高まるメロディーを与えている。そのため、筆者は画面の中でアクセントとなるごく少量の黄色、オレンジなど、対極的な青とのコントラスト効果のある色で彩って、この楽曲のメロディーに隠された積極的で明るい情緒的な雰囲気を表現している。そして、筆者は、画面の背後に徐々に散っていく細い線とパターンを用いて、この曲の終わりの「減速」と「デクレシェンド(音量を段々と弱めること)」による余韻が想像的な空間を表すようにした。

2) 「霓裳羽衣」(げいしゃううい)

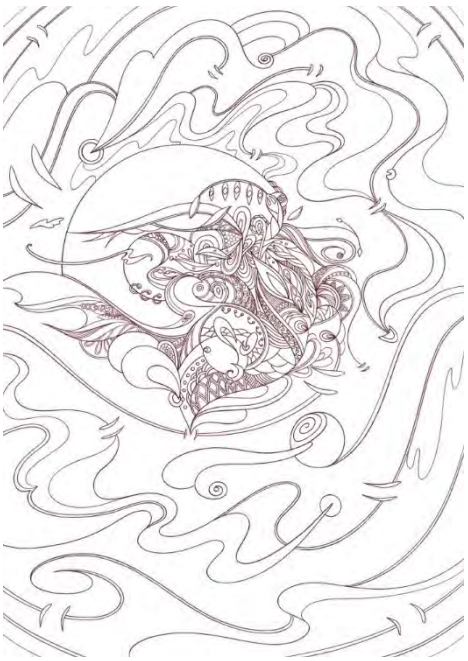


図 27：制作過程「霓裳羽衣」

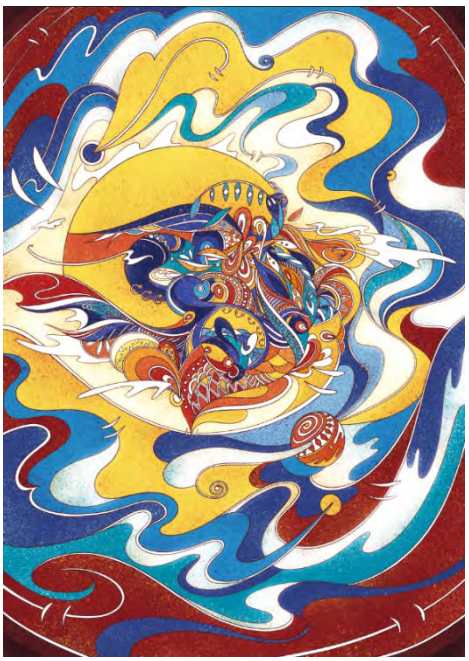


図 28：制作過程「霓裳羽衣」

iPad と Apple Pencil を用いた Procreate による平面作品である。この絵は、中国の作曲家杜薇(とび)が改編した中国唐代宮廷の楽曲「霓裳羽衣」をテーマにヴィジュアル化している。この曲は箏、琵琶、笛、二胡、アラビアドラムで合奏するものである。前半は箏と琵琶が奏でる律動に伴い、高らかな音色の笛の音が鳴り響き、時には琵琶と、時には箏と絡み合い、音楽旋律における「クレッシェンド」の処理は音楽の音に遠くから近くに来るような効果を与えた。その後、二胡が登場し、神秘的な「西域」音楽の特色を持つ主旋律を奏でる。ここで筆者は、画面の中で流動感のある線を用い、時計回りに起伏交錯しながら回転させるようにして、楽曲の前半の遠くから近づいてくる音を表現している。暗い赤色と明るめの黄色の組み合わせによって、箏のやや低い伴奏と笛の清らかで高らかな主旋律の対比を表現した。濃淡の異なる青を織り交ぜて、二胡がもた

らす柔らかでのびやかな、そして少し神秘的なメロディーを表現している。楽曲後半は、前半のメロディーをベースに変奏が加わり、アラビアドラムの参加により律動感が強くなっていく。「同音反復」や「順次進行」によってリズムが引き締まり、箏と琵琶のストロークが曲全体をクライマックスへと導く。それぞれの楽器が競い合い、「西域」音楽の魅力を醸し出しながら、中国唐代宮廷楽の華麗さを反映しているのである。ここで筆者は、画面中央に複雑な装飾線を用いて全曲のクライマックス部分が表現する複雑さと激しさを描いた。この後、再び二胡の主旋律が現れ、「デクレシェンド」（だんだん弱く）で終了する。筆者は、画面全体に白を織り込むことで、この曲の「徐々に強くなる」→「非常に強くなる」→「徐々に弱くなる」という音楽的な処理を表現した。華やかな夢のように、最後に残ったのはぼんやりとした白煙だけだった。

3)「延河畔に親を迎える」

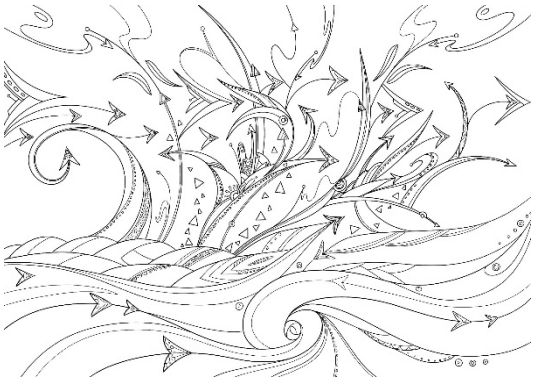


図 29：制作過程「延河畔に親を迎える」

図 30：制作過程「延河畔に親を迎える」

iPad と Apple Pencil を用いた Procreate による平面作品である。この絵は、中国陝北（せんほく）の民謡「延河畔に親を迎える」をテーマにヴィジュアル化している。この曲は笛の独奏、揚琴（ようきん）の伴奏である。筆者は画面の中で矢印のような形を多く用いて、笛のややシャープな独特の音色を表現し、画面中央の大きさの異なる三角形で揚琴伴奏の澄んだ音色を表現した。リズム感に満ちたラインは、楽曲の中で時には陽気で、時にはゆったりとしたリズムを示している。

この曲は複合三部形式であり、その首尾（第一部・第三部）と中部（第二部）は明らかな対比があり、第一部・第三部は明るく活発で、第二部は叙情的で少し感傷的でもある。それを筆者は、黄色と青、赤と緑という対照的な補色同士の色調で表現している。画面下半分は流動感のある線を使って楽曲の叙情的な奥深さを表現し、中央上部には、吹き上がるようなパターンを織り交ぜて楽曲の陽気で高揚した部分を表現した。作品の背景におけるテクスチャーとしての一つ一つの細かい色点は、絵の画面全体をよりリズム感に富んだものにしている。

4)「蘇南小曲」

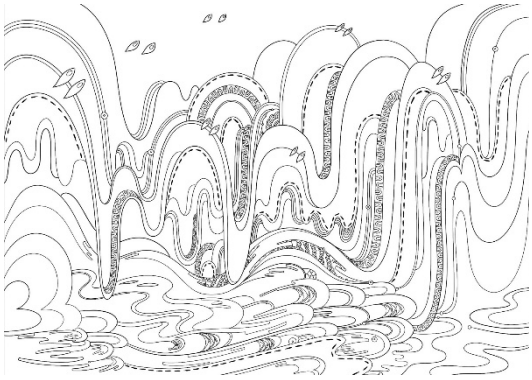


図 31：制作過程「蘇南小曲」

図 32：制作過程「蘇南小曲」

iPad と Apple Pencil を用いた Procreate による平面作品である。この絵は、中国錫劇（しゃくげき）の曲牌「老簧調」を改編した「蘇南小曲」をテーマにヴィジュアル化している。この曲は二胡独奏、揚琴伴奏である。筆者は楽曲中の二胡の主旋律にある多くの「跳躍進行」を連続的に起伏した線で示し、その中に一部は密集した多くの模様を描き込んで交互に疎密な対比とすることで、この曲の旋律上の対比を表現している。この曲は複合三部形式で、リズムは典型的な「速い」から「遅い」へ、そしてまた「速い」へ、という進行によってメロディーを結合することで、楽曲が表現する喜びと従容（しょうよう）たる感情（ゆったりと落ち着いているさま）を容易に感じることができる。また、この曲の音域は D4 から D6 までの 2 オクターブにまたがっているため、聴覚的に音が低すぎて憂鬱になることもなく、高すぎてうんざりすることもなく、これを筆者は明度と彩度がやや低い緑と黄色をメイントーンとすることで、この作品において、楽曲の自然な快適さと軽やかなメロディーを表現している。楽曲の中部のメロディーは、最初と最後よりも控えめで滑らかであり、二胡の音色に短三度グリッサンド（一つの音から他の音へすべらせるように演奏すること）と短二度トリル（装飾音）が多用され、歌うような感じを与えている。筆者は、画面の下半分に流動感のある形を重ねてこの楽曲の特徴を表現している。また、絵全体の画面をよりリズム感に富んでいるものにするために、作品の表面には細かい色点を施した。

5) 「茉莉花」

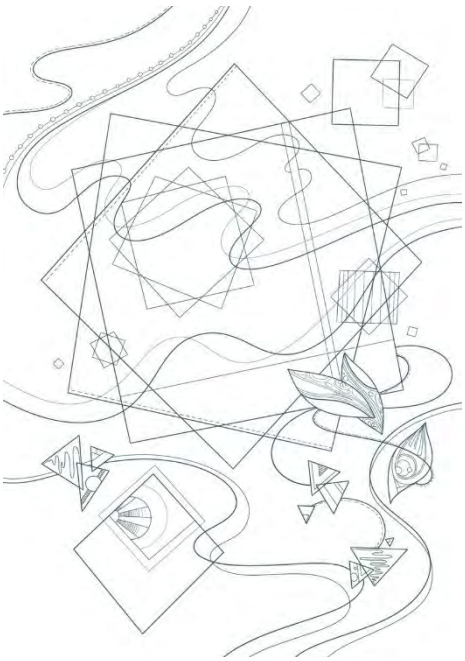


図 33：制作過程「茉莉花」

図 34：制作過程「茉莉花」

iPad と Apple Pencil を用いた Procreate による平面作品である。この絵は、中国江蘇の民謡「花調」を改編した「茉莉花」をテーマにヴィジュアル化している。この曲はピアノ独奏であり、そのメロディーは「順次進行」を主とし、4 拍子のリズムに合わせて、穏やかで上品でありながら、躍動感もある。ピアノは透明感のある明るい音色であるため、バイオリンなどの擦弦楽器（さつげんがっき）に比べて、より「角がはっきりしている」ように感じられる。そのため、筆者は大量に重なり、回転する四角形に自由な曲線を加えて、ピアノの音色、リズム、そしてメロディーの流動感を表現した。この曲は中国の伝統的な民謡で、短調なので叙情的で控えめな特徴があり、筆者は青藍をこの作品の主な色調とし、非常に浅い黄緑色を組み合わせて、これによってこの曲が穏やかでありながら内在的な力を持つ調性の特徴を表現した。同時に、筆者は楽曲中段での演奏力強化として、画面の中心部分に数多くの装飾的な図案を加え、この楽曲の感情的な表現力の豊かさを示している。

6）「彩雲追月」

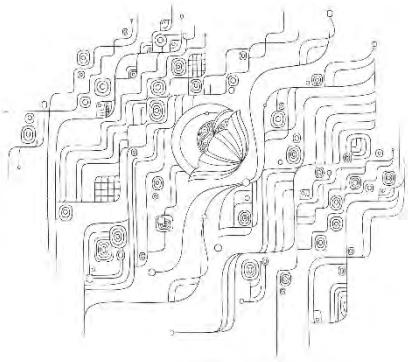


図 35：制作過程「彩雲追月」

図 36：制作過程「彩雲追月」

手描きしたものを写真撮影してデジタル化し、iPad と Apple Pencil を用いた Procreate による平面作品である。この絵は、中国広東の民間音楽「彩雲追月」をテーマにヴィジュアル化している。この曲はピアノ独奏であり、澄みきったトリルを使って中国の五音音階（ペンタトニック）に基づいた音楽テーマを引き出している。また、メロディーには五度の音程関係による「反復進行」を行い、流動的なアルペジオで豊富な和音を加え、極めて滑らかな律動感をもたらしている。そこで筆者は、大量に繰り返される階段状の線によって、この曲の流動感と主旋律の異なる音高での類似性を表現した。この曲は三部形式であり、前奏とコーダの部分のリズムは比較的緩く、中段のコンパクトなリズムと対照的である。筆者は、作品画面の要素の配置における疎密によってこれを示した。筆者には、この曲のメロディーが美しく、心地よく感じられる。主旋律の再現部分では、オクターブ奏法の伴奏は楽曲の情緒を高揚させ、音の強さによって音楽的な情緒を豊かにしており、筆者は、彩度の高い寒暖色を交互に配置することによって色彩の同時対比によるリズム感や、この曲の音楽情緒の多彩さを表現した。画面全体の律動性をさらに高めるために、作品表面には細かい色点を施している。

さいごに

修了研究として制作した作品は、他の作品とともに修了制作展（図 37、38）として、2023 年（令和 5 年）1 月 16－20 日、岩手大学図書館アザリアギャラリーにて展示した。

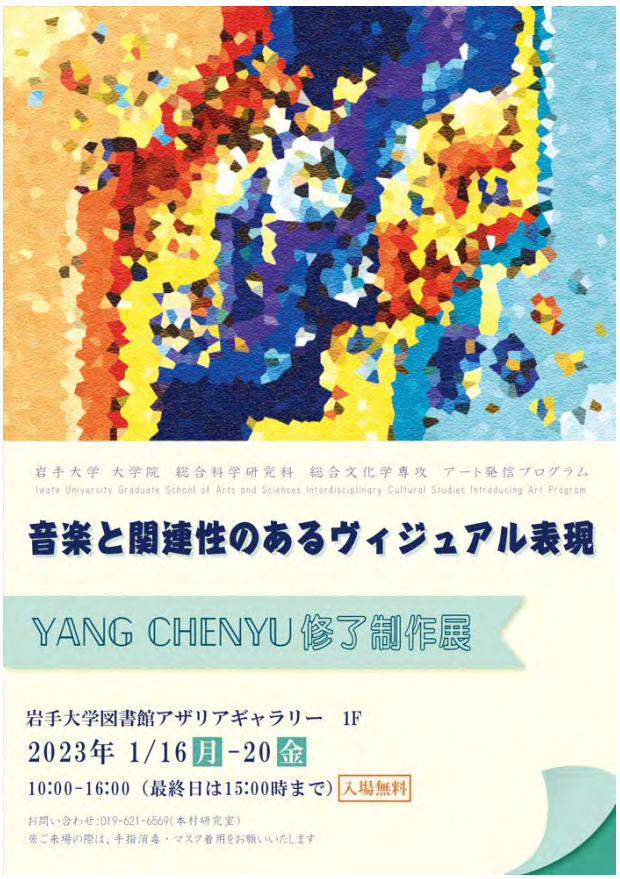
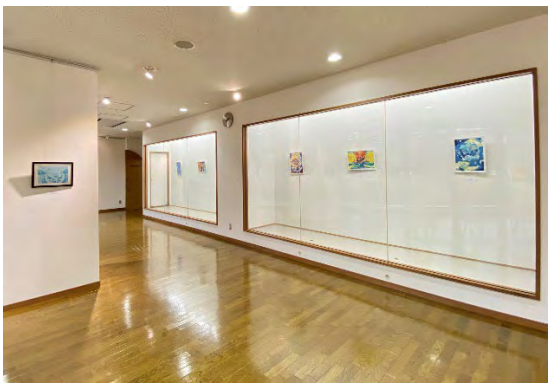


図 37：修了制作展ポスター



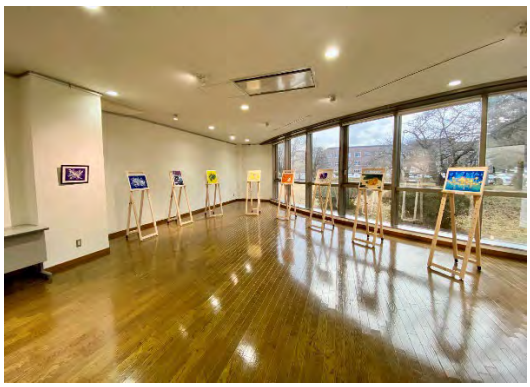


図 38：修了制作展の様子

2022 年（令和 4 年）1 月に実施した「視覚のカプリッチオ」展と同様の内容での来場者アンケートによると、「絵全体のテーマや世界観」、「描いてある対象・かたちなど」、「絵の構図や配置」、「配色や色調」について好評であり、原曲を知らなくてもメロディーやリズムを感じられるというような感想もみられた。筆者の意図する作品の提示がある程度成功していると思われる。

振り返ると、中国で音楽を専攻してきた筆者は、大学時代に広報関連や雑誌印刷関連の学生サークルに参加したことをきっかけに、美術の創作を目指すように方向転換した。日本文化に興味を持っていたため、2020 年（令和 2 年度）後期より岩手大学の研究生となり、美術・デザイン関連の学修を始めた。さらに、その翌年度から大学院総合科学研究科総合文化学専攻に進学して、音楽の学修経験を生かして「音楽と関連性のあるヴィジュアル表現の制作研究」を修了研究の研究課題とした。最初にドイツの芸術・デザイン運動を先導した造形芸術学校バウハウスの教師でもあったワシリー・カンディンスキーやパウル・クレーなどの歴史上有名な芸術家たちの研究理論および彼らの作品について文献を調査し、その内容を分析した。そのことによって、筆者は音楽と結合した色彩理論に基づくとともに、楽曲の形式や旋律の変化を平面構成の基軸にして、デジタル平面作品のあり方を考察しながら、ヴィジュアル表現を多様に展開することができた。一方で、筆者は今日の急速な発展の時代に、中国の伝統的な音楽文化が忘れ去られたり、失われたりすることを危惧していた。そこで筆者は、中国で音楽を専攻してきた経験を修了研究のテーマに結びつけ、中国民族音楽の伝承と発展のためにも新たな可能性を見いだし、多面的に表現するために中国民族音楽のヴィジュアル化を行った。このように、本研究は、音楽と美術・デザインにおける異なる芸術領域の交流と、その帰結としての変容を探ることによって、ヴィジュアル表現の表現領域を豊かにすることを試みた。今後の研究や制作において、音楽と関連性のあるヴィジュアル表現の可能性をさらに探求し、それを通じて音楽や視覚芸術への理解をより深め、その成果を公開することで芸術愛好者の美意識や関心を高めることにつなげたい。